

子どもの本

研究会

私の一冊

講談社絵本「孝女白菊」千葉省三著

河島 一夫

講談社絵本の「孝女白菊」をご存知でしょうか。私はこの絵本を読んだのは、店を手伝いし始めた二十歳半ば頃でした。熊本を題材とした有名な絵本であると知らされて読んだのでした。この絵本の発行は昭和十二年とあります。当時は大変有名な著作で、多くの子供達に親しみ読まれたものと思います。ご存知でない方は、一度は読んでいただきたい絵本です。数年前に復刻版も出ています。極簡単に粗筋を申しますと、白菊の中に捨てられていた生まれつきの女の赤ん坊をお武家さんの奥さんが見つけて育て、器量の良い娘さんになった頃、熊本は西南戦争になり、父親は戦で戦場に赴き、育ての母とその娘は、戦渦で阿蘇に避難することとなります。そこで、育ての母は夫の身を心配のあまり亡くなって、白菊一人残されてしまいます。そこに戦争が終わって父親が帰って来るのですが、ある日、山に猟に出たまま帰ってこなくなったのです。心配した白菊は父を探しに阿蘇の山深く探しに行きます。そこからが本筋に入っていくのですが、紙面が無くなりませんので、ここまでとしますが、最後には兄と父親に再開して終わるのです。そもそも、この「孝女白菊」は、明治十五年に哲学者で漢詩文に長けていた井上哲次郎という人が詩文で書きとどめていたものを明治歌壇の落合直文が当時流行だった新体詩的な叙情詩に明治二十二頃に書き下ろしています。その冒頭を紹介します。「阿蘇の山里秋深けて、眺め寂しき夕まぐれ、いづこの寺の鐘ならむ、諸行無常と告げわたる。」で始まるとても長い詩文です。この著書は、早くも佐村八郎という人が「家庭読本孝女白菊」という題で明治期に出版しています。そして、明治二十八年には東大のドイツ語教師のフローレンツが、これをドイツ語訳で出版していて、チリメン本の全ページ色刷りの豪華な本が、日本の土産本として出版されています。その後、英国のロイド氏が同じ様にしてチリメン本で、タイトルを「ホワイト・アスター」として出版しています。これらは大変売れたらしく、重版されています。当時は、外国までも知られた童話でした。この物語を元に千葉省三が書き下ろして講談社絵本で出版したものです。

(舒文堂 河島書店)